



岡村病院  
院内報

# 歩 (あゆみ)

第 36 号

発行 岡村病院  
編集 歩(あゆみ)  
編集委員会  
平成11年10月25日

## 岡村病院 基本理念

私たちは、患者さん本位を第一に考え  
高度な専門医療技術をもって  
地域社会に貢献することを目指します。



「バリ島の夕陽」 岡村院長 写 (H11年9月職員旅行にて)

今月のことば

## 笑顔を忘れずに

少し前でしたが、NHKのラジオで、高齢の男の人がアナウンサーから「健康の秘訣は何ですか」と問われたのに対して、「食べることを半分にし、寝ることを倍にして、笑うことを4倍にしてください」と答えていました。

この人は、ご自分の経験から言われたと思いますが、或る大学の精神科の先生も、その著書に「笑いの数だけ健康になる。怒りの数だけ病気を招く」と書いておられます。

笑いにも色々ありますが、明るい笑いが自分の心を楽しくするばかりでなく、周囲の人達の心をも明るくし、安らぎと励ましを与えることは私共が日頃経験する所です。

患者さんの書かれたものの中にも「看護婦さんの明るい笑顔に何度も心が救われ、勇気づけられた」と書いておられるのがありました。

忙しい仕事の中にも「明るい笑顔を忘れずに」いきましょう。

# 癒し（ヒーリング）

院長 岡村 高雄

（心臓血管外科科長）



最近、作曲家の坂本龍一さんの音楽がヒットチャートの一位を獲得していた事をご存じの方も多いと思います。この音楽は「癒し」の音楽であると言われており、現代社会の今後のキーワードになって行くように思われます。

近代社会は科学に対する不信感、現代医療に対する懐疑心、バブル経済への反省、競争社会への疲れなどにより多くの人々が「癒し」を求めていると新聞等にて報道されています。確かに、競争社会、グローバル化と「癒し」はある意味で対局に存在するものではないかとも考えられます。

医療の世界でも高度化により臓器移植等の進歩はしたものの、その進歩に対して医療側、受け取る側も十分な対応ができていない状況であります。

医療に於ける「癒し」の研究、アプローチはまだまだ不十分ですが、次第に広がりつつあるのも事実です。最近、『アートフル・アドボカシー生命の、美の、優しさの恢復』と言う本が出版されました。英語のアドボカシーとは「唱語・擁護」と言うような意味合いを持ち、芸術による「癒し」を提唱し、全国の福祉施設、障害者施設、医療施設での取り組みをまとめています。本院についても取材をされた記事が掲載されていますが、様々な施設で多くの取り組みがなされています。その代表的な取り組みがコンサートなどの音楽によるアプローチです。先日、テレビを見ていましたらある病院でバイオリンのコンサートを行っていました。コンサートと言っても病室の廊下の一部で行うコンサートでしたが、入院中の患者さんが大勢詰めかけ、その美しい音色に心を打たれ、安らぎを覚え感動していたのが印象的でした。さらには殆ど意識のない患者さんがベッドに横になったままで家族の人々と音楽を聴いている姿は医師の治療では及ばない芸術の尊さを知らされた思いでありました。私どもも治癒環境（Healing Enviro-

nement）の構築を目指して、病室のカラーリングや有線放送の設置、絵の展覧等を行っていますが、まだまだ不十分な状況です。もし、皆様方の中でお力添えを頂けるような事がございましたら何時でもご連絡を頂ければ有り難く存じます。

また、「癒し」の環境は何も大げさな芸術と言われる事でも十分に可能の様にも思われます。病室を回診していたときにある患者さんのティッシュペーパーの箱に詩が書いてありました。良い詩でしたので「どなたが書かれたのですか」とお尋ねしたところ、「看護学生さんが私を励ますために書いてくれて、大変に勇気付けられています。」と話して下さいました。芸術は至る所にあり、本当に「癒し」に大切な要素であると感じています。

近く、3階のベランダ部分を一部改造をして入院中の皆様が少しでも運動できて、少しでも「癒し」の要素が増える事ができるようにと考えていますのでご期待下さい。

「癒し」とは単にリラックスさせて心が幸福になるものだけでなく、かけがえのない命を大切にし、慈しみ、新しい勇気を与えてくれる事であり、芸術は大きな役割を担っていると考えられます。芸術を鑑賞する対象のみならず身近に関わって行けるように努力をして行きたいと考えています。今後も皆様方のお力添えにて、より一層「癒し」が病院、社会に定着するよう願っていますので、ご提案ご協力のほどをお願いいたします。

追記：『アートフル・アドボカシー  
生命の、美の、優しさの恢復』

上記の本をご希望の方は下記までご連絡をしてみして下さい。

■ 財団法人たんぼぼの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

TEL0742-43-7055/FAX07742-49-5501

## 検査室だより



### — コレステロール —

臨床検査技師

横田亜野子

皆さんは自分の健康を考えると、コレステロールを気にすることはないですか？ でも、コレステロールがどうして体に悪いのかご存じでしょうか。

コレステロールは脂質（脂肪分）の一種で、消化液やホルモンの原料になったり、細胞の膜を作ったり、人体になくはならないものですが、過剰になると動脈硬化を進行させる原因になります。

コレステロールは、血液の中では蛋白質や他の脂質とともに、リポ蛋白と呼ばれる粒子をつくっています。リポ蛋白には、脂質を各組織に

運び、過剰になると動脈硬化を進行させるLDL-コレステロールや、余分なコレステロールを肝臓に運んで動脈硬化を予防するHDL-コレステロールなどがあります。

コレステロール、特にLDL-コレステロールは過剰になると血管の壁に蓄積しやすく、これがひきがねになって動脈硬化が起こります。動脈硬化が進行すると、血管の壁にコレステロールや血管の筋肉などによってプラークと呼ばれるかたまりができ、これが大きくなって血管を細くしたり、破裂して閉塞させたりします。プラークが心臓を養っている血管（冠動脈）に作られると狭心症や心筋梗塞を、脳を養っている血管に起こると脳卒中を引き起こします。

また、コレステロールやトリグリセライド（中性脂肪の一種）が高い状態を高脂血症と呼びます。高脂血症は動脈硬化を促進する危険因子のひとつですが、特に高血圧、喫煙、糖尿病など他の動脈硬化危険因子を合わせ持っている人では更に危険性が高くなります。

## 俳句ポスト

水田雅吉子

逝く夏の人ごゑ響く玻璃戸かな 青木静枝

8月7、8日頃の立秋を境に暦の上では秋となります。暑さは一段と厳しく、夏の終わりを惜しむ気持ちより、秋を迎える喜びの方が勝るようです。軽快に行き過ぎる人の様子は昨日とちっとも変わらないのに、作者と同様、窓ガラスにふっと何かを感じ始める頃です。動物としての太古の記憶が、秋の気配を感じ取るのでしょうか。

五十路坂みしりと寒い梅雨の椅子 中山幹生

「人生五十年」と言われた昔から、平均寿命は30年ほど伸びました。しかし、定年までは残り数年……。50代をどうとらえるか、考え方で大きな差の出る年代かと思えます。御句に悲愴感を読み取るか、あるいは後年への野望の匂いを嗅ぎ取るか、読者しだいで読みが別れそうです。また、そこが面白いと言えます。私は後者の読みを致しましたが、いかがですか。

バンガロー閉づる掃除をしてをりぬ 八木 敬  
さりりとした風姿ながら、御句には独特の臨

場感があります。その場に立つように、あたりの季感が濃く感じられます。箒を持つ人、木の葉の鳴る音、光と影のコントラスト、それらが容易に想像されます。俳句仲間では「見える句」などと言ったりします。夏の終わった一抹の寂しさと共に、印象に残る句です。

鷺一羽青田にあれば気遣わしき 秋山武子

ニュースを見れば毎日～事件に事欠きませんのに、障子の小さな破れや、青田の一羽の鷺が気にかかってしょうがない……。人の心とはなんておかしなものでしょう。こっけい味のある一句ですね。また、人の幸せは地の恵みと共にあることを感じておられる、作者のお人柄まどうかかえる御句です。

稲妻を恐れる犬と住みており 奥山貫司

雷がなぜ起こるのが分かっている、あのピカッゴロゴロゴロはいくつになっても嫌なものです。稲妻を恐るる犬を見ていて、作者も大自然への恐れをふと思われたのではないのでしょうか。一句は事実を越えて不思議な宇宙感を持っているようです。

出航の港に残る酔芙蓉 青木静枝

梅雨四畳つゆぞ動かぬ絵筆かな 中山幹生

ポケットの底に少年の夏の砂 八木 敬

遠目こそ存在感の花石榴 秋山武子

ひと房のぶどうの中の女かな 雅吉子

「またお世話になりました。」

西尾八重子

私は前から血圧が高く、また不整脈があると  
言われていたのですが、平成3年2月、近くの  
スーパーで倒れてから半年余り寝たきりになっ  
ていました。このまま終わるのではないかと皆  
が心配してきていましたが、友だちの勧めで  
岡村病院へ来て本当に助けてもらいました。

2か月ほどの入院で、自分で生活できるよう  
になって退院し、そのあとは1週間に1回通院  
しました。

そして、平成6年7月に14日間入院してペー  
スメーカーを入れて頂きました。その後は非常  
に順調で、毎日近くのお宮の掃除を日課のよう  
にし、また老人会では好きな歌を歌ったり、詩  
吟をやったりして元気に過ごしていました。と  
ころが今年8月はじめ100才になる知人が亡く

なり、その10日祭が8月13日にありましたので、  
それに出席しようと家で準備していて気分が悪  
くなり、友人に助けてもらってタクシーで病院  
へ来て診ていただきました。心臓には格別心配  
な症状はないという事で、点滴をしてもらって  
帰りました。そのあと通院で2回点滴をしても  
らいよくなっていましたが、8月22日朝起きて  
立ち上がったら急に目まいがして、後向けに倒  
れ動けなくなりました。必死で電話まで這って  
行き、友だちに電話をかけ、救急車で病院へ連  
れて来てもらいました。

幸い骨折などはなく、頭の方も格別異状はな  
いと言うことで、1か月余りの入院で近日退院  
できることになりました。

もう84才ですので、いつ何が起こるか分かり  
ませんが、いつも何かあるとこの病院へ来て助  
けてもらっています。

また、またお世話になりました。

(平成11年9月28日記)

## ひろば

### 日本病院学会に 参加して

3F病棟 看護婦

武藤亜希子



私達2名は6月10、11日の2日間にわたり、  
北海道にて行われた日本病院学会第49回総会に  
参加する機会をいただきました。

私個人的には、このような看護のさまざまな  
取組みを聴講する機会は、学生であった看護研  
究以来のことです。看護学校卒業後、この岡村病  
院に勤務し、業務の忙しさの中でながされつつ  
あった時に学会に参加でき、“看護職だからで  
きる役割”また、“今ある現状よりさらによい結果  
が出せる看護実践の具体例”を紹介していただ  
き、どの発表も大変興味深い内容でありました。

看護をサービスとして捉えたとき、どのよう  
な貢献ができるのか、熱心に発表される演者  
の方や、研究に携わった方々に敬服すると同時に、  
同じ立場で臨床に出る者として良い刺激を受け、  
高知への帰途につくことができました。

さて、具体的な内容ですが、実際に私達は、  
看護部門の22の演題について聴講させていた  
きました。一番最初は、「入院時オリエンテー  
ションに関する工夫」という演題で高知より同  
行させていただいた細木ユニティ病院の方の発  
表でした。入院時オリエンテーションの方法を  
見直すことについて、治療環境に適応しやす  
いよう配慮した経緯や、個別性に応じた指導が必  
要であるという考えのもと、入院のしおりの他  
に小冊子の作成を行った結果についての内容で  
した。このことで、私は、患者さんは不安や緊  
張をもって入院生活を開始することになるので、  
最初の対応で順調にいくかどうかを左右する  
ということを改めて学びました。

また、他の病院で「CCUシンドロームに伴  
う精神障害の増加と原因」について調査した発  
表が印象に残りました。ICU、CCUでの精神障  
害の出現率は、医療の進歩により高齢者でも救  
命が可能となったこともあり、上昇傾向にあり  
ます。現状をふまえ、この病院ではすでに作成  
されている心筋梗塞のリハビリテーションプロ  
グラムと同様に、心不全の経過をパターン化し  
やすいよう、クリティカルパスを導入し、準備  
にとりかかっているとのことでした。病状に応

じて、早期離床・ストレス緩和に努めると同時に、高齢者に関しては環境の変化や孤独感を味わうことにより精神障害を起こすことが多いため、極力長く患者さんの側にいることが重要になります。また、家族が側にいるだけで、精神状態が安定する高齢者の方も多くおられます。核家族化や看護体制による面会も少なくなっている中、いかに家族の協力を得て、精神障害を予防していくかということは、当院でも今後重要な課題であると思われました。

また、他の病院では、意識障害のある患者さんの口腔清拭に、最近カテキンによる抗菌作用が注目されている緑茶を使用した効果の発表を行っていました。イソジンガーグルは、ポピドンヨード特有の味と臭いの不快を訴える患者さんが多く、耐性菌発生の問題もあります。この発表では、患者さんの立場に立った身近な視点での研究に感心させられました。

3題の発表を紹介させていただきましたが、他の発表もスライドによる写真や、説明が行われ、皆に理解しやすいよう工夫されている内容でした。全国の医療従事者を前に発表するという目的意識を持ち、一つの病院で協力し作成したものは、どれも熱意にあふれたものであると思いました。患者さん主体の看護を実践するため、より現状の改善や研究の素晴らしさをこの学会参加により得ることができたと思います。

最後になりましたが、この学会に参加する機会をくださった、院長先生をはじめ、皆様に深く感謝を致します。

## 新しい環境の中で

医事課

西内 千賀



岡村病院で社会人として働き始めて、早くも半年が過ぎようとしています。病院の事務所で仕事は、私にとって全く新しい分野の仕事内容ということで、不安と緊張で一杯でしたが、先輩方の丁寧な指導のもと、毎日仕事に励んでいます。

生まれも育ちも高知の私は、高校を卒業してから4年間県外で一人暮らしをしながら、学生生活を送ってきました。学生の頃は、友達と騒いだり、旅行やアルバイトをしたりと、24時間

をフル活用して、楽しみに重点を置いた日々でした。この春から環境も変わり、自分自身を見つめ直してみると、学生時代の自分への甘さが抜けきれておらず、まだまだ未熟な面がたくさんあるので、これからもっと勉強し成長して、魅力的な人になりたいと思います。

私は、地元高知に愛着心が強く、私の小さな力でも何か高知の為に役立ちたいと思い、帰ってきました。時々患者さんの方から反対に「頑張りゆうねえ」と、うれしい言葉を掛けてもらえることもあります。少しでも皆様のお役に立てるように務めたいと思います。これから実り多い秋へと移っていくので、色々な事に興味を示しながら、1日1日を大切に歩いていきたいです。

## バリ島旅行

4 F 病棟 看護婦

岡林 都子



今年の慰安旅行はインドネシアのバリ島5日間の旅でした。予定ではゆっくり時間が余るので、何をしようかなと思っていましたが、全然時間が足りなくて、あっという間に旅行が終わってしまったという感じでした。

旅行の中で一番楽しかったのはラフティングでした。ゴムボートで急流を下るスポーツで、最初は急流に落ちたらどうしようなどと不安がありましたが、どんどん進んでいくうちに、こわいというよりもスリリングでおもしろくなり、急流にもなれてきてちょっとした急流では物足りなくなるくらいでした。下る間、大声で笑ったりしてストレス解消になりました。

それと優雅に過ごせたことは、エステを3時間体験したことでした。アロマテラピーというエステで、ボディとフェイスをバックしたり、オイルでマッサージしたり、最後は、花びら(バラ)のおフロに入ったり、すてきな時間を過ごしました。

あと一日あれば納得して帰ってこれたかなと思います。もっとゆっくりホテルのプライベートビーチやプールで一日過ごしたかったなと思います。昼寝したり、本を読んだり、また泳いだりして……。

またバリ島へ行きたいと思います。食事日本

人の口にあっっておいしかったし、気候も湿度が少なくてさわやかでした。

やっぱり旅行は楽しいし、体験できないこともできるし最高だと思います。また来年はどこへ行くのか楽しみです。

## ニューフェイス 紹介 .....



吉村 隆子さん  
薬剤師  
徳島文理大学薬学部卒  
趣味 ガーデニング



石川 真紀さん  
薬局助手  
須崎高等学校卒  
趣味 読書



大村 由香さん  
看護婦  
高知中央高校看護科卒  
趣味 旅行



谷 佳苗さん  
看護婦  
県医師会准看護学院卒  
趣味 パソコン



岡 志保さん  
看護婦  
県医師会准看護学院卒  
趣味 音楽を聴くこと

## 退職 ごくろうさまでした。

森田 晃子さん(看護婦) 8月  
西岡 稔恵さん(看護婦) 8月  
中川 由美さん(看護婦) 8月  
常光さゆりさん(薬剤師) 8月  
仙頭 章子さん(看護婦) 9月  
今井採也香さん(看護学生) 9月

## 第19回 健康講座のお知らせ

日時 10月30日(土)  
午後1時30分～3時  
場所 岡村病院 2階 会議室  
会費 無料  
演題 「痔の話」  
講師 岡村病院外科消化器科  
科長 竹内 一八  
～お誘い合わせのうえ、お気軽にご参加下さい～

## 結核の勉強会

□ ■

平成11年10月7日に高知市保健所長森岡茂治先生をお招きして本院で「結核非常事態宣言に際して」と題して講演会が行われました。皆様もご存じの如く最近結核患者さんが増大傾向にあり、結核への対応、院内感染の予防、治療の進歩等に関して2時間ほどの講演を頂きました。本院の職員のみならず、他院の職員の方も出席下さり、活発な議論もなされて盛会の内に終了致しました。

今後も勉強の機会を設けて結核の発症予防と早期診断に向けて努力して行きたいと考えています。



## 編集後記

今年の職員旅行は、バリ島5日間の旅でした。  
第1班：9月15日(水)～19日(日) 17名  
第2班：9月22日(水)～26日(日) 16名  
表紙写真は、その時のものです。  
今回も御投稿、沢山ありがとうございました。

■ ホームページアドレス <http://www.okamura-hp.or.jp> ■ メールアドレス [info@okamura-hp.or.jp](mailto:info@okamura-hp.or.jp)